

第 16 分科会「里山と伝統文化」

テーマ：「里山の源流を探る」

日 時：2008 年 5 月 10 日（土）
場 所：県立中央博物館 会議室
参加者：12 名
スタッフ：清藤一順



内 容：

講 演

「房総の弥生時代を中心とした集落・農耕・土地利用」 渡邊 修一

「生物多様性と文化ー古墳時代から戦国時代ー」 笹生 衛

パネルディスカッション

佐久間 豊、渡邊 修一、笹生 衛、清藤 一順



活動の経過

これまで、第 2 回里山シンポジウムに関連して「遺跡から見た里山景観」、第 3 回では「里山景観とその保全」、そして、今回の第 5 回では「里山の源流を探る」というテーマにより講演会或いはパネルディスカッションを系統的に開催してきた。

今回の参加者は少なかったが、研究会的な雰囲気でも意義ある意見交換・討論が行われた。

一連の行事は、今日の里山を考え、今後の対策を模索する上で、里山が「何時・どのように」発生し変遷してきたのか、その歴史的背景と里山の実態を考古学・文献史学の立場から検証することが必要と考えたからである。

成 果

今回のパネルディスカッションにおける渡邊、笹生両氏の発表内容の要旨は以下のとおりである。渡邊氏は、人類の歴史は、労働対象の根幹である土地 へのかかわり方の歴史とし、狩猟採集による食料の獲得を経て、農耕・牧畜の開始により自ら拡大再生産を始めることにより飛躍的進歩をとげ、その過程で自らの集落の周辺にある自然環境に様々な形で手を加えていったという考えを述べた。

具体的には、縄文時代における「定住的集落」の存在の一方、はるかに多数存在する「一時的集落」を焼畑農耕の拡大に起因する可能性があるとした。

弥生時代前期から中期前葉には、定住集落がほとんど確認されず一時的集落を移動していたことが見られること、広い沖積地に面してではなく樹枝状の支谷に面した台地上に集落が形成されていることが多く、複数の遺跡からイネや雑穀のプラントオパールが多量に検出されていることから、ほぼ確実にイネを含む雑穀栽培型の焼畑農耕が行われていたと推定した。

弥生時代中期中葉から中期後葉には水田耕作が開始され、これにかかわる集落は主要河川下流域の沖積地に面する台地に立地し、水田経営のための集中的な労働に対処するため、複数血縁集団の定住により大規模集落が形成されたとした。

弥生時代後期の集落と土地利用に関しては三つの類型化を行い、第一は主要河川下流域に占地して中期後半の集落・生産域のあり方を引き継ぐもの、第二は主要河川河口部から離れた海岸平野に水田を形成しこれに面した微高地または台地に集落を営むもの、第三は集落が再び樹枝状の支谷に面する台地上に占地するが小規模ながら定住的な集落が営まれるもの、に分類した。

特に下総台地北部に特徴的に現れる第三の類型が、確実にこの時期に谷津田の開発が進行したこ

弥生時代前後の集落類型と自然とのかかわり

時 期	類型	居住域	立地	農耕類型	自然条件改変
縄文時代 弥生時代前期～ 中期前葉	A	仮設の建物数棟	樹枝状支谷に面する台地上	雑穀栽培型？焼畑	森林焼払い・再生
	B	恒久的建物数棟	樹枝状支谷に面する台地上	常畑？	森林伐採・施肥
弥生時代中期中葉 ～後葉	B	恒久的建物数棟	樹枝状支谷に面する台地上	常畑？	森林伐採・施肥
	C 1	恒久的建物十数棟 ～数十棟	河川下流域の沖積地に面する台地上または微高地	水田・常畑	水路・堰・圃場造成・森林伐採・施肥
弥生時代後期～ 古墳時代	C 1	恒久的建物十数棟 ～数十棟	河川下流域の沖積地に面する台地上または微高地	水田・常畑	水路・堰・圃場造成・森林伐採・施肥
	C 2	恒久的建物十数棟 ～数十棟	海岸平野の沖積地に面する台地上または微高地	水田・常畑	水路・堰・圃場造成・森林伐採・施肥
	D	恒久的建物数棟	樹枝状支谷に面する台地上	谷津田・常畑	水路・堰・圃場造成・森林伐採・施肥

とを示すと述べた。

笹生氏は、人間が自然環境に働きかけて作った生活環境を、①居住する家屋と集落、②食料生産を行うための水田、畑、牧場等、③食料や生活材を得る場所としての山林、河川、海の3分類を行った。

この生活環境を人間がどのように認識し、意味づけてきたかは、人間の生活・自然環境に対する利用のあり方を規定し、この人間の行動を規定する内容が、歴史的に伝承・蓄積され、社会的集団の中で生活や行動の規範・価値観として共有される。これを、環境に対する「文化」として定義できるとし、これを具体的に表しているのが地域の伝承や歴史資料、それに基づいた信仰・習俗・祭祀・儀礼等であり、地域ごとに特徴的な文化景観を形成するとした。

また、人間は、①食料生産環境の不安定に生産技術の高度化、②生活環境の不安定に対して生活関連技術の高度化、③社会環境の不安定に社会整備等という「欲求」と、環境に対する価値観・行動規範である「文化」とのバランスの中で、自然環境を積極的に開発することと開発を抑制し自然環境を保全することを、長い歴史の中で行ってきた。つまり、「里山」の景観は、開発とその抑制の相克の中で模索され、形成されたものである。そのため、「里山」を単純に再生することは、現在の自然環境や生物多様性の保全にはつながらず、その歴史の変遷を具体的に検証・分析し、人間と自然環境が共生する文化のあり方、生物多様性の方法を新たに組み立てる必要があるとした。

氏は、「環境の認識・意味づけと開発・保全の文化史」に関して、4世紀後半～5世紀における農業生産に不可欠な灌漑用水源の神格化、後世の神社に連続する祭祀遺跡の成立、『常陸国風土記』の開発伝承と千葉県内における古代集落の動態、『大宝令』雑令の天然資源に関する公私で共に利用する規定、殺生を忌避する意識の形成、香取社周辺の開発と環境保全等の、発掘調査の成果や歴史資料を紹介し、現在失われつつある里山と生物多様性の再生には、歴史的な変遷・背景を踏まえた新たな文化基盤が必要不可欠であると述べている。

これらの講演を踏まえパネルディスカッションの結果、里山の出現について以下の点が確認できた。

- 1 焼畑や河川流域の沖積地を中心とした水田耕作から谷津田の開発による定住が開始され、弥生時代後期にその原型を見ることができるということ。
- 2 里山は人間と自然の永い関りの歴史の中で、山野などの開発とその抑制が繰り返されながら、信仰・習俗・規範などに基づき節度をもった自然資源の活用がなされてきたこと。
すなわち、里山と生物多様性の保全は、自然環境を即物的に保存するのではなく、人間が自然をどのように認識してきたかという価値観・「文化」を、その基盤として行う必要があるのである。

まとめ

今後の方向性としては、当分科会の活動は、以上のような一定程度の結果を得た今日、これまでの成果を、何らかの形で整理し、ひとまずの区切りとする予定である。